

2012年(平成24年)11月17日 土曜日

エッセー
自然が
育む
力

「危ない。危ない」とした。「もし何かあった子どもの行動を止める声ら誰が責任を取るのか」。は、公園などでもよく聞そんな弱気な姿勢は、周きます。何で危ないの？ 囲の大人へも伝染しやす危ないと決めているのく、「子どもを守る行為は誰？ 大人は目の前の『危険を回避する』とい

危険と冒険 決定権を子どもに

を制約しようという気持ち
が働いています。

最近は子どもだけでな

う感覚になっていることが、教育面で大きなマイナスだと考えます。

く、一人前の大人でさえ

冒険という言葉があり

危険だとか、普段と違う

ます。但馬は加藤文太郎

チャレンジすることを嫌や植村直己など多くの冒
う傾向が強くなってきま 険家を誕生させた地域で

もありました。冒険とは「危険な乗り越え目的を成し遂げる」こと。そして自分

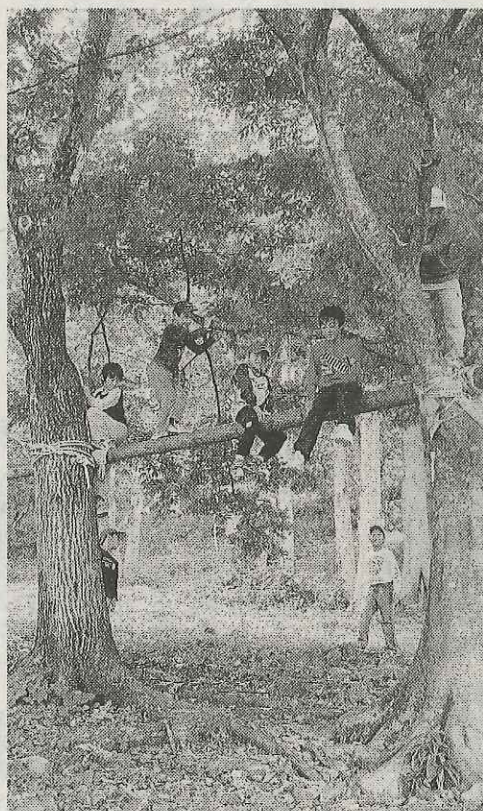
と自分で決められるチャンス」をできるだけつくる努力を続けることが、

の命を守る」と。私は 冒険心が備わった子どもだからこそ冒険心を もは、前向きな考え方と「自発的に小さな危険を

子どもの能力を高める近道なのです。

持った子ども達を育みた地、道な努力、強い精神力 乗り越える経験の積み重ねと考えるだけでなく、を養うこととなり、その「ね」が必要です。小さな

(尼崎市立美方高原自然の家所長 田中誉人)



木登りに熱中する子どもたち

危険が察知できなければ、大きな危険を察知する能力も備わりません。ぜひ子どもの行動を大人の感覚だけで制約しないでください。誰でも痛ければやめます。けがをすれば次は気を付けます。

目の前の「もし?」という最悪の想定で考えるのではなく、じつと子どもを信じて待ちましよう。本当に危険と感

時に手を貸すのが大人の役目。「子どもが危険だ

と自分で決められるチャ
ンス」をできるだけだけつく

る努力を続けることが、
子どもの能力を高める近

道なのです。
(尼崎市立美方高原自

然の家所長 田中誉人